

## 淀橋のいわれ

むかしむかし、紀伊国（和歌山県）から鈴木九郎（九十郎）という浪人が流浪のすえ、中野のあたりに来て住みつきました。その当時、今の新宿区西部から中野区にかけての地を「中野」と呼んでいました。九郎の先祖は熊野神社に奉仕し、源氏の恩顧を受けていました。そのため、義経が奥州平泉にのがれたとき、そのあとを追って義経の軍に加わりました。ところが義経が敗れたので、奥州各地を渡り歩き、九郎の代に中野へ流れ着いたのでした。

九郎は、ふとしたことが縁で蓄財できたので、郷里の熊野権現をやしきの中に観請（かんじょう）をその地に移して祭ること）して信心しました。そのおかげでしょうか、数年後には家運が栄えて金銀が蔵に満ちあふれ、広大な田畑も手にいれました。近くの者は彼を「中野長者」と呼ぶようになりました。

ところが、財宝があればある程気になるものです。この宝を蔵から移し、どこかに隠しておこうと考えました。思案の末に、近くの森の中に埋めておくことにしました。そこで下男たちに背負わせて森に行っては、穴を掘って隠しました。しかし、仕事を手伝った下男たちが、いつか裏切って盗むかも知れない、人にしゃべってしまうかも知れないと思うと、落ちつくことができなくなりました。九郎は、下男たちが森から戻る日暮れどき、通り道の橋下まで来ると下男を切り殺して川の流れの中に突き落としていました。

こうして数人の下男が行きは荷物を背負って行くのに、帰りは誰も戻らないので、近所の人たちは、この橋を「いとま乞いの橋」とか「姿見ずの橋」というようになりました。

この財宝かくしが一段落したので、長者はほっとしました。やがて一人娘の縁談がまとまり、婚礼の式をとり行なうことになりました。その挙式の夕方、恐ろしいことが起こりました。犬の遠吠えが近づいたかと思うと、突然空がにわかにかき曇り、黒い雲がわきあがり、すさまじい雷鳴がとどろきました。見る間に長者の娘は一匹の蛇になり、十二社の方に飛ぶように走りぬけ池におどりこんでしまいました。

長者はこの恐ろしさを目のあたりにして、罪のない下男たちを殺した報いと覚りました。そして良心のかしやくにたえかねて苦しみました。ちようどそのころ名僧として天下に知られていた春屋（しゅゑ）禅師に今までのことをすべて告白し、自分の罪を悔い改めて救いを求めました。

禅師は、すぐに十二社の池の端（はた）に行き、大般若経（だいはんんにゃきょう）を読み、経を池の上に投げました。すると娘は元の姿に戻り天に昇っていきました。禅師の教えに従い、罪を悔い心をいれかえた長者は、髪をそり、名を正蓮と改めました。土中に埋めた財宝をもとにして、自分のやしきを寺にしました。この寺の名は多宝山成願寺です。

さて、三代將軍家光（八代吉宗との説もあり）が、鷹狩の途中、熊野神社に詣で、この長者とそれにまつわる話を聞き、ことに橋の由来を知って「これは不吉な話で、よくない。この川のそばに水車がある景色は、大阪の淀川べりを思い出させるので、今後、淀橋と名を改めるように」ということになり、淀橋の名が定まったといわれています。

また、土地の人たちは、長者の下男が切り殺された話を「縁起のわるい話」として、長い間、婚礼にはこの橋を渡らないことにしていました。

それを大正二年十一月、中野に住む富豪浅田政吉氏が、本家の婚礼の折、川岸に祭壇を設けて盛

熊野神社に 室町時代の応永年間(一三九四)〜一四二八年)に中野長生



神田川の様子です。手前が上流、流れの先に淀橋があります。



神田川の植物は、アイノコイトモ、ヒメガマ、マツバイ、ナガエミクリ、オオカナダモ、カワヂシャなど、24種類が確認されています。



羽衣橋の近くに昔から大きな銭湯・羽衣湯があります。今は近代化してサウナ、露天風呂、ローリングバスなどのあるスーパー銭湯です。



車で通過するときには左右をよく見ないと淀橋だとは気付きません。



神田川沿いはきれいな散歩道となっています。所々に説明板が立っています。



淀橋地区を流れる神田川の笹塚支流は暗渠になっています。川の上は児童公園になり動物のオブジェがあります。左は羽衣橋の親柱です。



江戸名所図絵 「淀橋の水車」



左図：淀橋の横に「淀橋の由来」を記した説明板が立っています。右図：淀橋水車の絵の拡大です。淀橋は新宿区と中野区の境を流れる神田川に架かる青梅街道上の橋です。



「淀橋の親柱」



原則として、橋の起点に(橋に向かって)立った場合左の親柱には漢字で、右親柱はひらがなで橋の名前を書くよう方で定められています。左には橋の完成年も書いてあります。

大に「おはらい」の儀式を行ない、自ら渡り初めをしました。それ以後、花嫁の一行もこの橋を渡るようになったということです。

《参 考》

出典：新宿区の文化財(6) 伝説・伝承 (新宿区教育委員会編集発行 昭和57年3月発行)

山より十二所権現をうつし祀ったのが始まりです。(紀州の人渡辺与兵衛が熊野の乱の折、神宝をたずさえてこの地にのがれ来て、熊野神社を建てたという説もあります。)江戸中期の享保のころ(一七六〇〜一七三五)には社も衰えていたので、土地の有志が、別当寺である成願寺と相談し、神社奉行の許可を得て修復しました。それ以後、将軍吉宗の鷹狩の折の参拝などもあり、江戸近郊の景勝の地として文人墨客など、訪れる人も多く、「十二社」の名で、江戸有数の名勝地になっていきました。



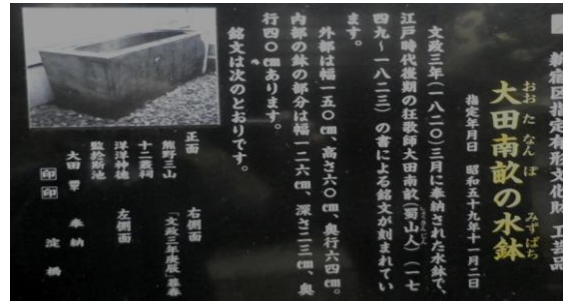
熊野神社。淀橋・新宿駅周辺・歌舞伎町の総鎮守となっています。神社には、碑文・七人役者図絵馬(新宿区指定有形文化財)・式三番奉納額(新宿区指定有形文化財)などの文化財があります。



十二社の碑。この地に池や滝がある江戸西郊の景勝地であること記した記念碑です。嘉永4(1851)年3月に建てられました。高さ210cm、幅119cmです。



碑は江戸繁盛記を著した儒学者「寺門静軒」と中野宝仙寺の僧侶「負笈道人」が当時名高かった景勝地「十二社」の様子を紹介したものです。262字あります。裏面は負笈道人の略歴と人柄を寺門静軒が記し、286字あります。書は中川憲齋です。



文政3(1820)年奉納の水鉢です。江戸時代後期の狂歌師大田南畝(蜀山人)の書による銘文が刻まれています。



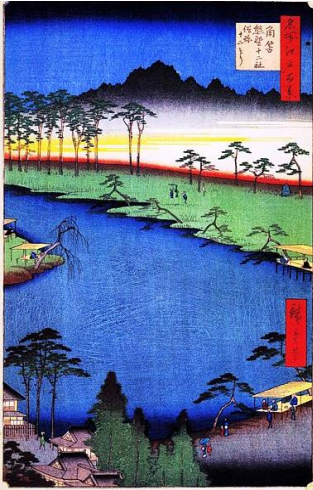
水鉢の大きさは外部幅150cm、高さ60cm、奥行64cm。鉢の内部は、幅126cm、深さ23cm、奥行40cmあります。



神輿蔵です。神社の宮神輿(大神輿)と町神輿(大人神輿・子ども神輿)が保管されています。

## 十二社池

じゅうにそういけ



「名所江戸百景」歌川広重  
現在の西新宿4丁目に池がありました。隣接する十二社大滝とともに江戸の景勝地となっていました。1968(昭和43)年、新宿副都心計画により十二社池は埋め立てられてしまいました。正確な現在地は、新宿区西新宿4-15(池北側)から4-31(池南側)です。



下略図の住友不動産西新宿ビル3号館(水色)とパシフィックマークス新宿パークサイド(紺色)の場所が池のあった所

北 十二社通り 南

